

氏 名	BURITICA ALZATE, Juliana
学 位 の 種 類	博 士 (学術)
学 位 記 番 号	甲 第 1 9 8 号
学位授与年月日	2 0 1 7 年 6 月 3 0 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目	Representations of the Female Body in Japanese Literature by Women Writers: Intersections between Literature, Culture, and Gender and Sexuality (日本文学における女性作家による女性身体の表象 ——文学、文化、ジェンダー・セクシュアリティの 交差——)
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 生 駒 夏 美 副 査 講 師 ソニア デール (一橋大学) 副 査 教 授 ジェレマイア L. オルバーグ 副 査 教 授 加 藤 恵 津 子

---

## 論文内容の要旨

本論文は現代日本の女性作家三名（桐野夏生、伊藤比呂美、川上未映子）の作品を取り上げ、それらの作品に見られる女性身体表象をフェミニズムとジェンダー・セクシュアリティの視点と受容理論の視点から分析するものである。これらの作品は、母性や女性性、女性身体について社会文化的に構築されている規範や理想像を扱っているが、伝統的な女性像を描くのではなく、それらをめぐる葛藤が描かれ、脱構築・転覆が試みられている。特に女性に社会から期待される役割を超えて、エージェンシーを獲得していく様子や、タブーをされる話題をあえて語る姿勢が共通して見られる。また、彼女たちの作品が身体知に裏付けられた具体的な身体を描いていることは特筆に値する。透明純粋な主体性としてではなく、これらの作家が描く女性は生理や妊娠・出産、更年期などを両義的なものとして体験する存在であり、これらの体験を通して自己同一性が形成されている。著者はこれらの作品をまとめて扱うことにより、文学によるエンパワメントの可能性を模索し、本論文を通じて身体の意味づけを変化させることを目指す。

第一章は桐野、伊藤、川上それぞれの日本文学における位置を紹介し、本論文の理論的背景を説明するものである。身体をめぐる議論はフェミニズムの領域での長い蓄積がある。長い歴史の中で、男性は文化、女性は自然あるいは肉体という二項対立的な構図で語られることは多く、女性の身体性が男女差別の理由づけとして用いられてきた。これは西欧にも日本にも見られる表象である。フェミニズムはこのようなステレオタイプに抵抗する論、逆に女性身体を肯定的に評価しようとする論を揺れ動いて来た。本論文は女性を神話化するような本質主義的議論からは距離を置きつつ、一方で身体を無化するような論とは明確に姿勢を異にする。GroszやButler、Young、Bordoらの論を援用して、著者は現実の身体が文化によって表象される様子を扱うことの重要性を主張する。

第二章は桐野夏生の『東京島』を扱う。舞台となる無人島は、主人公と他の漂着者らによって階層構造のミニチュア社会に形作られ、その中で主人公は自らのサバイバルを賭して様々な女性役割を引き受けることとなる。主人公女性は自分を神話化しようとする動きを認識しつつ、これに抵抗する。彼女の妊娠や出産は美化されずに描かれ、身体についての主人公の相反する心情がそのまま表現されている。女性のステレオタイプの理想像を壊しつつ、読者には脱出を成し遂げる主人公の強さが伝えられ、また女性性や男性性といったものが社会の中で構築される様子が描かれた脱構築の作品と本論は分析する。

第三章は伊藤比呂美の詩を扱う。「カノコ殺し」を始めとする伊藤の詩は、特に母性をめぐる社会規範を破壊する言説となっている。特に本論文では伊藤の詩が個人的な体験に徹頭徹尾寄り添うものである点に注目し、「個人的なことは政治的なこと」というフェミニズムの標語に結びつけ、伊藤の作品の重要性を主張する。伊藤が描く身体体験は美化されたものではなく、むしろタブーとされている否定的な感情や事象である。これら表象から排除されてきたものを、詩という形で表象することの意義を本論文は評価する。

第四章は川上未映子の『乳と卵』を扱う。この作品では母子関係と共に女性の美を巡る議論が扱われている。経済的弱者である女性が豊胸手術を受ける事によって自己尊重を取り戻し、かつ経済的な恩恵を受けようとするエピソードは、「美」が女性の投資財として機能する現代社会の矛盾を明らかにする。一方、彼女の娘は、母の葛藤を見て苦悩し、女性身体を受け入れられなくなる。本論文は、ボディエンパワメントが貨幣社会においては市場原理に取り込まれる可能性を指摘し、この作品が優れたカウンター議論となると分析する。

第五章は前の三つの章で扱った三名の作品を、一つの論文で扱うことの意義を整理している。テーマとして生理、妊娠、出産、身体、美など、これらの作品が触れたものを整理し、三名の共通点や相違点を明らかにする。

最後に本論文は他の日本文学作品の中で、本論文の焦点からは外れるもののエンパワメントとなりうる作品群を紹介し、また個人的な語りの実践として著者自身の体験を記して丁としている。

## 論文審査結果の要旨

2017年5月9日10:10より、国際基督教大学教育研究棟1-257にて、Juliana Buritica Alzateさんの博士論文審査が、生駒夏美教授、ソニア・デール講師（一橋大学）、ジェレマイア・オルバーグ教授、加藤恵津子教授の四名で構成される審査委員会によって開かれた。審査は公開され、審査委員以外に数名の大学院生が参加した。審査は冒頭Buritica Alzateさんから、研究成果についての要約と、中間審査の指摘に対し、どのような改善がなされたかの説明があった。続いて、審査委員による講評と質問が提示された。

2017年2月9日に行われた中間審査では、扱う作品の選択根拠を示すこと、日本文学作品の分析であるので、日本社会のコンテクストに注意すること、随所に繰り返しが多い点を改善することなどが求められた。

2017年5月9日の審査において、審査委員会はこれら中間審査で指摘された課題が、概ね改善されているという点で合意した。特に「身体化」という概念が強く打ち出され、論をまとめる屋台骨となっていることが大いに評価された。一方、さらなる改善点や今後の研究の展望について、各審査委員から意見が出された。まずオルバーグ教授は、本論文が女性を読者として想定していることを認めつつ、女性身体を持たない読者への効果は何かと尋ねた。これに対し、Buritica Alzateさんは文学作品の特長は他者への共感を許すことにあり、体験していないことでも共感を育むことは可能となる点を挙げ、本論文を通じて日本で女性身体を持つ生の理解が高まると述べた。

加藤教授は、最終稿が日本や東京といった特定の文化社会を背景としていることを明確化した点を評価した上で、第三章と第四章のタイトルがわかりにくいため改善を求めた。

外部審査委員のデール講師は、本論文が一貫性をもつ完成度の高いものであることを評価した上で、扱うテキストが平仮名、片仮名、漢字などで変化を持って書かれている点が分析から抜け落ちている点を指摘した。これらの文字の特異性は「身体化」とも接続しうる問題系であるので、今後の研究において分析することが提案された。また、これらの作品においては、実母と子供の関係のみが扱われているので、今後は養子と親の関係なども扱うと多様性の点でよりよい研究となるとの提案がされた。

生駒教授は、他の審査委員同様、中間審査からの改善を評価した上で、まだ冗長な部分が多い点、また“docile bodies”や“precariat”など、用語の説明が不十分である点が指摘された。また、デール講師の指摘にあった文字の分析については、漢字が古来男性によって使用され、平仮名が女性によって発明されたことを指摘し、これらの使い分けが大いにジェンダーの問題を含むことが示唆され、今後の研究で追及するようにとの指導がされた。

上述のように、様々な指摘や改善点が挙げられた。これらの指摘に対し、Buritica Alzate さんからは、出版に向けて改善に取り組む旨が表明され、また今後の研究の課題として取り組む決意が示された。

審査は10:10より11:30まで行われ、その後審査委員会による協議が行われた。審査委員会は本論文が日本文学における女性身体の表象をフェミニズムとジェンダー・セクシュアリティの点から研究したものとして、オリジナルかつ学術的に洗練されたものであることを確認し、著者が研究者として十分な学術的見識と研究能力を有していると認め、全員一致で博士学位を授与するに値するとの結論に至った。